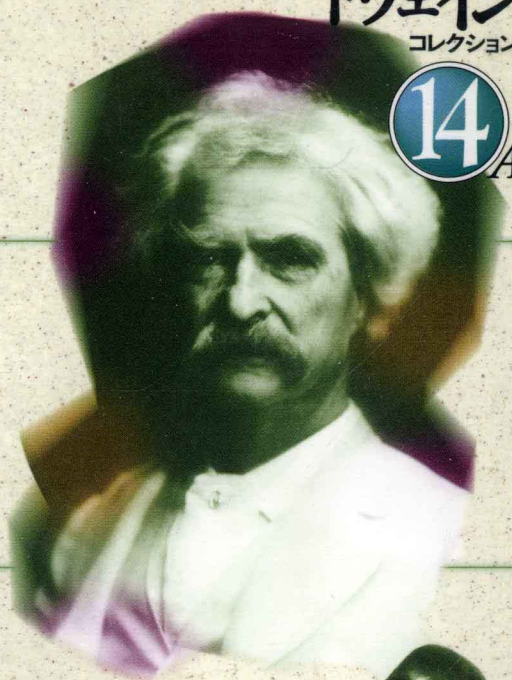


赤道に沿って上

訳★飯塚英一

マーク・トウェイン
コレクション

14A



Mark Twain Collection 14A

Following the Equator

14^A

に沿って 上

訳 ★ 飯塚英一



彩流社

《訳者略歴》

飯塚英一（いいづか えいいち）

東京都出身。法政大学を経て、法政大学大学院英文学専攻博士課程修了。英文学専攻。帝京大学助教授。

訳者にトウェインの『ヨーロッパ放浪記（上）』、『地中海遊覧記（下）』（共訳）がある。

赤道に沿って（上）——マーク・トウェイン コレクション⑩-A

1999年7月20日 発行

定価は、カバーに
表示してあります

著 者 マーク・トウェイン

訳 者 飯 塚 英 一

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03(3234)5931 Fax 03(3234)5932

組版 (有) ポイントナイン

印刷 (株) 平河工業社

製本 (有) 青 木 製 本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-535-3 C0397

目次／赤道に沿って
(上)

第一章 上品でやさしい船長 13

家族も同行すること——アメリカ大陸横断——ワリモ号に乗船——安物のデッキチェア——やさしい船長——失意の帰国——元氣なパーサー——いちばん陽気な客——悪習の矯正法——医者と腰痛——お堅い人——喫煙制限——すねかじり

第二章 あわれブラウンの運命やいかに 23

衣替え——釣り、ヘビ、ブーメランのほら話——記憶の話——驚くべき記憶術の達人——グラント將軍の記憶力——いささか品のない話

第三章 美しいホノルル 40

ホノルル——サンドイッチ諸島の思い出——カメハメハ大王とりホリホ——タブー——島の人口——カナカ語しか話さなくなった若者——ホノルルのコレラ騒動——ホノルル今昔——ハンセン病施設

第四章 「ホース・ビリヤード」で負ける 55

ホノルル出航——トビウオ——赤道に接近——船がゆっくり進むわけ——船の前庭——赤道通過——ホースビリヤード、またの名をシャッフルボード——ウォーターベリイ時計——甲板清掃——ペンキ塗り替え——経度百八十度——一日が消える——誕生日のない赤ちゃん

第五章 労働者「募集」——という名の奴隷狩り 66

発音のお稽古——ロバート・バーンスはえらい——南十字星——やっかいな星座——どれも

これもビクトリア——地図でみる南洋諸島——アロファ島とフォートウナ島——クイーンズランドのプランテーションの人集め——ウォーン船長の覚え書き——全住民を連れて行くわけではない

第六章

クイーンズランド式カナカ人撲滅法 74

商売のじゃまをする宣教師——砂糖きび農園主とカナカ人——農園主の言い分——カナカ人の文明化——宣教師の言い分——その結果——帰りなくなったカナカ人の若者——妙案——クイーンズランドの死亡率

第七章

搾取されるフィジーの人々 85

フィジー諸島——スバ——ダールースから来た船——上陸——フィジーはまだ真冬——知事に会う——なぜフィジーはイギリスに譲渡されたか——古き良きフィジー人——フィジーにまぎれ込んだ囚人たち——失敗に終った結婚——制限つきの不滅

第八章

快足モア 93

島々の密集する海——国をもたないふたりの男——ニュージールランドの博物学者——オーストラレーシアに生息する動物——動物、昆虫、鳥——カモノハシ——詩と盗作

第九章

風変わりで新しい、驚くべきオーストラリア 103

オーストラリアに近づく——夜の海に光るイルカ——シドニー港への入り口——ダンカン・ダンバー号の遭難——シドニー港——シドニー市——オーストラリアの春——氣候風土——

旅行者への情報——オーストラリアの大きさ——砂嵐と熱風

第十章

イギリスの野蛮な法律 113

オーストラリアの発見——囚人の移送——ひどい懲罰——イギリスの法律今昔——死ぬまで囚人をむちで打つ——入植者来る——ニューサウスウェールズ連隊——ラム酒で稼ぐ——飲酒がはびこる——ラム酒一ガロンで十万ドル——オーストラリアの発展——莫大な資源

第十一章

シドニー——アメリカ人に近いイギリス人の住む町 118

英語圏の人々のもてなし——作家が書き残した感謝の言葉——ゲイン氏の賛辞——シドニーの人口——アメリカ的色彩の濃いイギリス人の住む町——「大牧場主」——大邸宅とヒツジ王国——羊毛とマトン——オーストラリア人とアメリカ人——物売りの英語——イギリスは「故郷」——食卓での会話——イギリス人聴衆と植民地の聴衆

第十二章

サムソンより強いハヌマン 124

宣教師X氏——インドにキリスト教が浸透しない理由——壮大な夢——ヒンズーの奇跡と伝説——サムソンとハヌマン——砂岩の尾根——サムソンの門はどこにある？

第十三章

サメの腹から出てきたもの 130

オーストラレーシアの公共施設——シドニーの植物園——四つの楽しみ——知事公邸——知事の任務——海軍省——シドニー港めぐり——サメ釣り——セシル・ローズのサメと初めての大金——ただめしにたかるサメ

第十四章

植民地間の驚くべき競争意識

143

病気の再発——列車でメルボルンへ——距離感のつかめない地図——ビクトリア植民地——シドニー発の往復キップ——オルバリーで列車を乗り換える——税関という壁——「何と、みごとに」——ブルーマウンテン——ウサギの山——公営鉄道レストラン——給仕は貴婦人——「洗羊液」——車内で飲むコーヒーのまずさ——見られるものと見られないもの

第十五章

ワガワガとイギリス名門貴族相続事件

149

ワガワガ——ティッチボーン家相続事件——解けない謎——不思議な招待——実現した招待——ヘンリー・バスキムの謎——バスキム・ホール——マーク・トウェインの葬式

第十六章

年に一度の大騒ぎ、メルボルン・カップ記念競馬

155

メルボルンとその魅力——メルボルン・カップ記念競馬——競馬開催日当日——大観衆——高価な衣装——オーストラリアのいかれた連中——あいつは死んだのか？——オーストラリアでの感動的な歓迎——メルボルンの羊毛仲買人——博物館——お城のような豪邸——メルボルンの起源

第十七章

オーストラリアは植民地の稼ぎ頭

162

大英帝国——貿易による帝国全体の稼ぎ——オーストラリアの貿易額——アデレードまで——ブローケン・ヒルの銀鉱——たいへんな遠回り——灌木地帯と作家にとっての利用価値——追跡者——一つの賭け——どうして牛の足跡の違いがわかるのか？

第十八章

あらゆる宗教がはやる国 167

ユーカリの木——孤独な木——ハリエニシダとエニシダ——誰にでも欠点はある——若い冒險者——目標二百ポンド、稼いだのは二千万ポンド——広大な土地の投機ブーム——ブーム崩壊——死体起きて踊りだす——風変わりな商売——カンガルーの皮を買う男——アデレードにふたたび立ち寄る——待てば海路の日和あり——あらゆる宗教を受け入れる健全な空気——どうして靈を信じちゃいけないんだ？

第十九章

ワライカワセミが生き残れるわけ 176

植物園——あらゆる国から持ち帰った植物——アデレードの動物園——ワライカワセミ——デインゴ——名前のつけまちがい——メルボルンからサンフランシスコまで電報はどう伝わるか——祝日が大好きな人々——平均気温——死亡率——一八三六年の州成立宣言を祝う記念日——祝賀会場の初期入植者たち——老人たちの持久力——アボリジニの賢さ——古代から伝わるブーメラン

第二十章

キツネ狩りでの出来事 185

訪問者——昔を語り合う——キツネ狩り——愚か者を正しく見きわめる——いかにして税関を通り抜けたか——イタリアのお役人

第二十一章

ヒ素入りプディングを食べさせた男 193

「ウィートウィート」——人口抑制——ビクトリア——アボリジニ虐殺——クイーンズラン

ドの開拓時代——ドラマの材料——藪の中に潜むアボリジニ——ヒ素入りプディング——復讐——考え方は正しいが方法がまずかった

第二十二章

アボリジニの不思議な力

203

再びアボリジニについて——その資質——ボールをよける——跳躍板を使って跳ぶ——信じがたい跳躍——カンガルはアボリジニに跳び方を教わる——井戸掘り——忍耐力——けがの処置——芸術的能力——フェニモア・クーパーは機会を逸した——オーストラリアのスラング

第二十三章

世界で最も酒を飲む人々

213

ホーシヤム（ビクトリア植民地）まで——ホーシヤムにて——ホテルにて——胡椒の木——農業学校と四十人の実習生——高い気温——フィートでは測れない道路の広さ——忘れやすい鳥の名前——カササギと貴婦人——果実の木——土壌——羊の毛を刈る——スタウエルまで——金を産する土地——月収七万五千ドルの贅沢な暮らし——おいしいワイン——世界で最も酒を飲む人々——スリーシスターズ——ユーカリの木と水

第二十四章

純粹なバララット英語

220

バララットにいたる道——バララット市——一八五一年の大発見——オーストラリアに押し寄せる人々——「巨大な天然金塊」——金採掘税——闘争と勝利——ピーター・レイラーとユレイカの柵——「鉛筆の印」——バララットのすばらしい彫像——バララットの人口——バララットの英語

第二十五章

マーク・トウエインクラブの驚くべき正体 228

ベンディゴ行き——キャッスルメインの神父さん——歩いたほうが時間の節約——ベンディゴの成り立ち——貴重な金の粒——我慢の後には成功あり——ブランク氏のおかげ——さりげなくほのめかす——わたしはアイルランド人のブランク氏が気に入ってしまった——コリガン城とマーク・トウエインクラブ——バスコム氏にまつわる長年の謎がついに解けた

第二十六章

ニュージールランドはどこにある？ 239

ニュージールランドはどこにある？——ほとんどの人が知らない——人々が知っていると思ひ込んでること——イェール大学の教授とニュージールランドから来た客員教授

第二十七章

救世主ロビンソン 246

南極から吹く風——タスマニア——原住民の絶滅——絵にかかれた通達——救世主——手ごわい十六人

第二十八章

エドに幸運をもたらしたいたずら 259

時いたれば、人あらわる——エド・ジャクソンがヴァンダビルド会長を訪ねたわけ——ふたりの会見——旧友の息子の友人を歓迎する——テスト中——重要な仕事を任される——仲間たちのもとへ戻る

第二十九章

ホバートは最もきれいな町

269

初期のタスマニア——ホバートの町——地球上で最もきれいな町——博物館——後天的な趣味を身につけたオウム——ガラスの矢じり——長生きしすぎた人々のための収容施設

第三十章

自然の残酷な仕打ち

276

ニュージーランドのグرافに到着——ウサギの疫病の発生地——ウサギの天敵——ダニーデン——美しい町——ハッキン博士を訪問する——博士の博物館——木質化した毛虫——未熟サナダムシ——美術協会運営の美術館

第三十一章

「メリーボロは最悪ですよ」

282

急行列車——「メリーボロは最悪ですよ」——時を知らせるベルの音——鉄道の運営

第三十二章

ニュージーランドにおける女性の貢献度

290

クライストチャーチ——りっぱな博物館——翡翠の飾り物——巨大なモア——ニュージーランドに最初に来たマオリ——婦人参政権——ニュージーランドの法律の「人」には女性も含まれる——カモノハシを飼ひ慣らす——リトルトンからフローラ号に乗る——まるで家畜運搬船——船を乗り換えて快適な気分

第三十三章

オーストラリアのカールスバート

298

ネルソンの町——町いちばんの大事件「モンガタブ殺人事件」——犯人バージェスの自白——マウント・イーデンからの眺め——ロトルアの温水湖と間欠泉——温泉地帯——カウリ樹

脂——タンガリワ山地

第三十四章

テレパシーは誤った情報も伝える 305

ギズボーン湾——帆船で乗客をつり上げる——バララットの青バエ——入れ歯——バララット・フライ号でネイピアからヘイスティングスへ行く——ナギモドキの木——テレパシー

第三十五章

愛国主義者マオリ 310

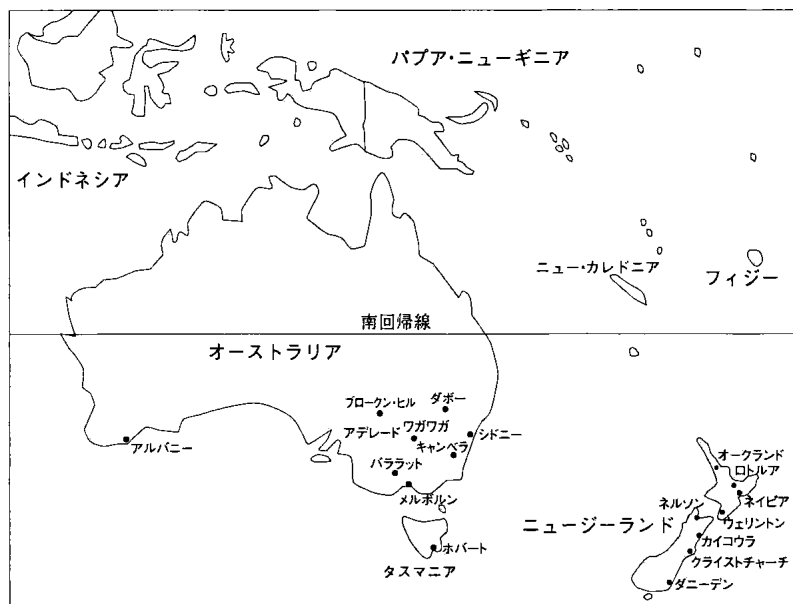
四時間で五十マイルを走る——快適な車両——ワンガヌイの町——マオリがたくさんいる——まだ増えている——マオリへの賛辞——宣教師のやり方は間違いだ——マオリのタブ——不思議な印——奇妙な戦争記念碑——ウエリントン

第三十六章

地名で詩を作る 316

ムーア夫人の詩——ウィリアム・アブソンの悲運——イギリス皇太子を氣どる男——夢の世界——シドニーに戻る——奇妙な地名で詩を作る

赤道に沿って
(上)



本書に出てくる主な地域

本文中の「」は訳註を示し、原註は〔原註〕と*で示す。

第一章 上品でやさしい船長

人は並みの悪癖は持たなくても、たちの悪い習性を持つことがある。

——まぬけのウィルソンの新カレンダー

今回のわたしの世界一周講演旅行はパリが出発点になった。それまで二年ほど、パリに滞在していたからである。

われわれはまずアメリカへ渡って旅装を整えたが、これにはあまり時間はかからなかった。家族ふたりが同行することになった。ついでに、わたしの顔にできた疔〔悪性の吹き出物〕もいっしょだ。辞書によると、疔という語には宝石の一種という意味もあるそうだ。辞書にユーモアは似合わないだろう。

われわれ一行は、夏のさかりに、西へ向けてニューヨークを発った。はるばる太平洋岸まで、退役軍人のポンド氏がわれわれの世話をしてくれた。道中はずっと暖かったが、オレゴン州とカナダのブリティッシュ・コロンビア州で山火事が起きていたので、大陸横断旅行の後半の二週間は息苦しいくらいにけむかった。太平洋岸に着いても、さらにもう一週間煙のなかにいなければならなかった。船が出航できなかったからだ。われわれの乗る船は煙につつまれて接岸していたが、ドックで修理されるのを待っていたのである。だが、とうとう、出航することになった。所要日数四十日、かたつむりの歩みのようなアメリカ大陸横断の旅にやっと終止符をうったのだ。

われわれを乗せた船は、午後三時ごろ、きらめく波間を西に向かって出航した。この日の海は魅惑的で、美しく、涼しげであった。乗客は誰もがこの美しい海を歓迎していた。もちろん、わたしも大歓迎

である。とくに、この二、三週間、ひどい砂ぼこりと、煙と、暑さに悩まされたあとだけに、なおさらである。これでとりあえず三週間は、船上の休暇が楽しめるのだ。われわれの行く手には太平洋があるだけで、これといってとくにすることもなければ、気のすまないことは何もしなくてもいいのだ。ビクトリア（カナダ西部のバンクーバー島東南端にある海港）の町並みは煙のなかにかすみ、やがて消えようとしていた。わたしは双眼鏡をのぞくのをやめ、ゆったりとおちついた気分でデッキチェアに腰をおろした。ところが、そのデッキチェアがこわれてしまい、ほかの乗客が大勢いるところで恥をかいてしまった。それはビクトリアでいちばん大きな家具屋で買ったもので、りっぱな椅子と同じくらい高価なものだったが、じっさいは安物だったのだ。太平洋やインド洋の航海では、乗客は自前のデッキチェアを持ち込むか、デッキチェアなしで過ごさなければならぬ。それは遠い昔の大西洋航海時代——すなわち、船旅の暗黒時代——から変わっていない。

われわれの船はかなり快適だったが、食事は遠洋航路ではおきまりのもの——食材は神によってあたえられたものだが、料理のしかたは悪魔のしわざとしか思えない食事——が出てきた。船内の風紀は太平洋、インド洋を航海中ずっとよかった。だが、この船は熱帯地方を航海するための整備がきちんとあられていなかった。それはあまり問題ではない。熱帯を定期的に行き来する船にとって、こんなことはあたりまえだからだ。ゴキブリも供給過剰ぎみだったが、これも暑い地域を航海する船にとってはあたりまえのことだ——少なくとも、長い間使われて古くなった船にとっては当然のことだ。

われらが船の若き船長は、美男子で、背が高く、よくひきしまった体型をしていて、スマートな制服がとてもよく似合う人だった。彼はひじょうに誠実な人柄で、礼儀正しく、度がすぎるほど応対がていねいだった。その物腰には、彼のいるところはどこであろうと、大事な客を迎える応接間のように思わせるほどの穏やかな優雅さと気品がただよっていた。船長は喫煙室を避けていた。悪意はないのだ。彼